

SRID NEWSLETTER

No. 375 FEBRUARY 2007 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.srid.jp>

2月号

「地産地消」と「グローバリゼーションからの転換」 (近況報告を兼ねて)

(有)ジ・アソシエイツ 三上 恒生

Goorgoorlou”-これこそ、セネガル大衆の心意気だ-

ダカール大学(UCAD) 鈴井 宣行

カイヤール村でのNGO最終報告調査同行記

ダカール大学(UCAD) 鈴井 宣行

お知らせ

1. 幹事会 3月22日(木) 午後6時30分~8時30分 場所 JBIC

3. 懇談会

○日時: 3月2日(金) 18:30-20:30頃

○講師: 食政策センター ビジョン21、NPO 日本有機農業研究会理事 安田節子氏

○テーマ: 遺伝子組み換え作物と途上国の農業 (仮題)

○会場: 国際協力銀行 開発金融研究所内 大会議室

「地産地消」と「グローバリゼーションからの転換」

(有)ジ・アソシエイツ 三上 恒生

国際開発の現場から離れ、SRID活動にも殆ど参加しなくなって10年近くが経過してしまっています。

現在は日本国内の地域振興の仕事を主として行っていますが、特に「食料自給を目的とした国内農林水産業の振興」と「環境問題」を大きなテーマに忙しく走り回っています。この国内の仕事を通じて、「開発問題」について近年考えていることを皆さんに読んでもらい、ご意見を伺えればと思い、レポートを書かせて頂きます。

既にご存知とは思いますが、日本では「地産地消」という動きが活発になってきています。これは「その土地で取れた農産物をその土地で消費しよう」というもので、いくつかの異

なる背景から生まれてきた動きであると私は認識しています。

- ① 世界的に見た場合、将来の食糧需給関係はかなり逼迫すると予想される中、日本の食糧安全保障上、下がる一方の食料自給率を一定水準まで上げておきたい。

(資源の乏しい日本という国としての背景)

- ② 輸入される食料の「安全」の問題が消費者の関心事となっており、「顔の見える食料」と言った表現で、「トレーサビリティ」の観点から国産の食材が注目されている(国産だから安全という認識は必ずしも正しく無いが)

(消費者の立場からの背景)

- ③ 日本の地域産業は、バブル時代に公共事業頼り一色になっており、殆どの地域で「土建業」が主幹産業となってしまっていた。しかし頼みの公共事業削減で、新たな地域雇用創出が急務になっている。各種新規事業の試みもあるが、土木業に携わっている職員の殆どは実家が農家であったり、兼業で農業をしていたりしているため、農業に戻るのが一番自然であるとの認識になってきている。

(地域産業育成の立場からの背景)

- ④ その土地で取れた新鮮な食材を、学校給食や家庭料理で活用することで、住民の地域に対する理解や、地域活動への参加意欲が向上する。

(地域の活性化からの背景)

その他にもまだ多くの背景があるかと思いますが、とにかく今「地産地消」の動きが各地で活発になってきています。

当初は農民の保護の立場から、民間企業などの農業分野への新規参入に消極的であった農林水産省も、まだ十分とは言えないまでもかなり門戸を開放してきています。

この「地産地消」活動は、「輸入品より多少高くても安全な地域の食材を食べよう」というものですが、実は輸送エネルギーを減らすことで、環境問題にも大きく貢献する可能性を秘めています。

その土地で取れたものをその土地で消費するのですから、長距離輸送は必要がありません。船や飛行機を使って輸送する必要も無ければ、日本国内を高速道路で運ぶ必要も無くなります。つまり、輸送エネルギーが不必要な分、省エネに役立ち、CO₂ 排出量削減に貢献することになります。

これまで輸送手段の進歩に従って、「世界は狭く」なり、どこでも自由に移動が可能になる。地域経済もグローバルイゼーションによって、「経済的に比較優位な産業」を育成し、その製品を輸出することで、不足する製品や資源を輸入することが経済発展の基本とされてきましたが、現在の環境問題などを考えると、果たしてそれが正しいのだろうかという疑問を持たざるを得ません。その地域の生活に必要なものは、その地域内である程度は生産するという地産地消の考え方は、ともすると「保護主義」だとの批判を受けがちですが、

これからの時代必要な考え方になってくると思わざるを得ません。

話は変わりますが、10年ほど前に当時の元林野庁長官の興味深い話を聞きました。要約すると以下の通りです。

- ① 日本は戦後、一生懸命植林政策を続けてきた。
- ② 結果として、日本の植林面積は同時期のアメリカ、ロシアにほぼ匹敵するほどであった。
- ③ 現在日本の木材消費量は、植林をした森林資源から得られる増分（一年間の成長分で、伐採しても資源量が減らない量）とちょうど匹敵する。したがって、計算上は自給自足が可能となっている。
- ④ しかし現実には7割を超える木材資源は海外から輸入されており、日本の植林エリアは荒れ放題のところが多くなってきている。
- ⑤ 海外の木材を輸入する理由は安いからである。では何故安いのか？日本と比べて「人件費が安い」「伐採しやすい場所に資源があり陸上輸送コストが安い」「環境コスト（植林の必要性など）が安い」といった要因が、船賃をかけても国産材より安くしている。
- ⑥ では、この安いコストは永遠に続くのだろうか？途上国の人件費は日本よりも早く増加するであろうし、内陸部まで入っていかなければ森林が無い状態にもなるであろうし、環境コストも増えてくる。また一番の問題は、石油の値段が上がれば船での輸送コストが上昇する。
- ⑦ 私（元林野庁長官）の計算では20年程度のうちに、国産材と輸入材のコストが逆転する可能性がある。
- ⑧ その頃になって、日本の植林地帯が完全に荒れ放題になって、木材生産が不可能になったら、日本は世界の笑いものになるであろう。
- ⑨ 植林されている地域の中には、急斜面の場所など林業に適さない場所もあるが、適地の林業は守っていく必要があるのではないかと？

この話も、今になって思えば「地産地消」に通じるものだと認識しています。

一度、機会があれば前提条件を当てはめて上記元林野庁長官のシミュレーションを実際に試してみようと思っています。輸入材と国産材のコスト比較をして、その主たるコスト要因の上昇率を何通りか当てはめてみれば良いわけで、ワークショップなどのテーマとしても面白いのでは？と思います（環境問題、国内の林業問題、輸出入の問題など多くのファクターが絡み合っています）。

日本が環境問題に関して世界のリーダーになる絶好のチャンスであった京都会議の議定書に定められたCO₂の削減目標を、EU各国は既にほぼクリアしているにも関わらず、日本ではいまだにCO₂が増えている現状があります。

食料問題も、環境問題（地球環境の悪化）に大きな影響を受けています。

グローバリゼーションの名の下に、米国流の経済政策に慣らされてきた日本は、今ドイツ

など欧州諸国の政策に学び、方針転換をするべき時期に来ているのではないのでしょうか？それ程便利にならなくても、フローの所得は伸びなくても、環境と共生し、ストックを生かして豊かな生活を送るといった発想はヨーロッパ諸国には古くから根付いているものですが、残念ながら日本にはその知識と経験の蓄積が少ないと思えてなりません。

日本国内の将来を考える上でも、国際開発の世界においても、米国流の開発理論からの転換を図るために、私たち自身が新たに勉強をし直さなければならない、そうでなければ胸を張って途上国の人たちに技術移転はできないのでは？というのが現在の心境です。その勉強がある程度できた段階で、体力気力が残っていれば再び国際開発の世界に戻りたいと思っています。

セネガル報告（4）

Goorgoorlou”—これこそ、セネガル大衆の心意気だ—

ダカル大学 鈴 井 宣 行

今、セネガルは新聞紙上では大統領選挙キャンペーンの真っ最中である。この大統領選挙には RND 党首で、著名なブラック・アフリカ文学者でもあるマディオール・ディウフ（Madior DIOUF）教授（ダカル大学）の愛娘ン デラ・スマニ・ディウフ（Ndella Soumani DIOUF）さんが歴史上、二人目の女性候補として今回のセネガル大統領選に立候補を表明している（残念ながら主要 15 候補にはなっていない）。世界ではヒラリー・クリントン女史のアメリカ、ロワイヤル女史のフランスなど女性の大統領選挙立候補が何かと話題になっているが、イスラム教徒が 90%以上を占めるこのセネガルでこのような行動を取る女性が出現し始めたことは変化の一つと言えるだろう。また、パリ（今年ハリスボン）・ダカル・ラリーにウッド大統領の令嬢シンディリエ・ウッドさんのパリ・ダカル・ラリー参戦もあった。

しかし、セネガルの人々はそのようなことには関係なく、日々の生活に追われている。先日、新聞報道でウッド大統領が 70 億 CFA（約 16 億円）もの大金をセネガル政府に提供するということが知れ渡った。これに対し、世論がどんな反応を示すだろうかと興味を持って見ていたが、彼らはすぐに反応を示した。大衆紙である“Populaire“の世論欄に掲載された大衆の意見はほとんど全員が拒否反応であった。「それは素晴らしいことだ。」などという意見はなかった。それよりもなぜこのような大金を大統領が持っているのかという疑問のほうが強く出ていた。「その金はセネガル国民のものであり、財産だ。」という意見はほとんどの大衆が持っている。大学の警備員や下級事務員も同様であった。セネガル社会の下層階級に属する人々にとっては、どうしようもなく、やりきれない感情が出てく

るのは当然であろう。大統領は選挙を控え、この行為が国家のためとの思いでしたのであろうが、逆に国民の感情を逆撫でしてしまったようである。確かに筆者も国民感情としてセネガル大衆と同じ気持ちである。ワッド大統領はセネガルを隣国ギニア・コナクリのような・混乱した状況に陥らせたいのかと思わず、考えてしまった。

しかし、セネガルの大衆は賢明である。それは彼らの日常生活の中に脈打つ、ある精神的バックボーンとも言える、ポジティブな考え方があるからである。それが“Goorgoorlou”（注）なのである。セネガルには有名な言葉で“Teranga”という考え方があるが、それとは質を異にした、まさに忍耐強いセネガル人らしい考え方である。

この“Goorgoorlou”という言葉自体は 1981 年から大衆紙“Le Temoins”に掲載され、RTS 放送（セネガル放送）でテレビ番組“Goorgoorlu”が一世を風靡したのである。

主人公 Goor とその妻 Diekh の二人（このお二人はセネガルで最も有名な喜劇俳優で、Diekh 役の女優さんはいわゆる「ジョンゴマ」と称される女性である。）の軽妙な掛け合いで話が進んでいく。勿論、その間には別の登場人物の存在もあるが。一つのエピソードは短く、その中には日常生活の中で起こる様々なできごとがテーマとして扱われている。この“Goorgoorlu”は漫画としても書店で販売されている。これを読み、見ると、セネガル人の考え方が少しは理解できるようになると思われるが、テレビではウォロフ語で話が進んでいたため、ウォロフ語の分かる人に通訳をしてもらいながら、見なければならぬので、少々大変である。

このテレビ番組が公開されて以降、日常挨拶の中でもこの“Goorgoorlou”という言葉が盛んに使われるようになってきたようだ。筆者は当初、どういう意味で使われているのか、理解できなかったが、少しずつ話を聞いているうちに、その使い方が多方面に渡っていることに気がついた。

一例を挙げれば、日本大使館のすぐ前の地区はルブス Rebeuss と呼ばれる、ダカールの中でも最貧困地区と言われる地区がある。そこに一軒のバーがある。昼食時間帯に覗いてみると、狭い店の中は満員状態である。飲酒を目的にした店であることは一目瞭然なのに、ここにはキリスト教徒だけではなく、禁酒禁煙を旨とするイスラム教徒も多く出入りしている。この店の店主はいわゆる、“Goorgoorlou”である。この最貧困地区で自分自身の生活も豊かではなく、最低限の生活を余儀なくされているにもかかわらず、生活が少しでも楽になるように、毎日懸命に働きながら、家族を養っている。

先日、2月25日に実施される予定の大統領選挙で、ワッド現大統領の対抗馬と見られている大統領候補が新聞紙上で“Gooroolou.”という言葉を使用して、彼の主張を展開した。筆者はセネガル人に「どうしてあの政治家が“Goorgoorlou”なのか。」と尋ねてみた。彼は“*Il est certainement Goorgoorlou. C'est seulement Abdoulaye WADE (President du*

Senegal)qui n'est pas Goorgoorlou au Senegal.”と語気を荒げて、語ってくれたのである。

先日の社会党党首など野党の無届けデモによる逮捕劇—しかし、即日、釈放された—など、ここに来てワッド大統領の強権的な姿勢が目につくようになってきた。

現在、ダカール市内は自動車道の大工事中である。これはワッド大統領の社会基盤整備政策の大プロジェクトである。確かに道路建設、あるいは改修工事は必要である。しかし、ダカール市内よりも地方の拠点都市と他の地方の拠点都市—殊に、現時点では中南部の拠点都市であるカオラックと内陸部の拠点都市であるタンバクンダを結ぶ国道が四輪駆動車でさえほとんど走れない状態である—とを結ぶ国道の速やかな整備補修・改修のほうが国民からは強く求められているのである。

さらに、巨大プロジェクトとして大統領が示したのは、新国際空港建設プロジェクトである。筆者はこの建設予定地とされているンディアス Ndiass 村を訪ねてきた。この予定地はダカールから筆者の 50CC—書類上は 50CC だが、90CC ぐらいはあり、60 km ぐらいは軽く出る—で 1 時間 30 分（距離はダカールから 65 km と表示されている）のところにあり、穏やかで、静かな村である。村人に空港予定地を聞いたところ、「あの奥のほう」と、道路から脇に入ったところにある丘—ちなみにセネガルには「山」と言われるほどの高さのものはない。ギニア・ビサウとの国境辺りは少しは高くなっているが、—の方を指さしていた。村人たちは「あれは《ワッドのプロジェクト》だ。」と言い、村人たちは「そんなことは我々には関係ないし、建設には反対だ。」と言っているようなものであった。この村人たちも、もちろん貧困生活を送っているが、日々、懸命に働き、生活を如何によくするかと知恵を出しながら、考えている“Goorgoorlou”なのである。

このような“Goorgoorlou”たちのパワーが今後のセネガルを僅かずつかもしれないが、変革していく力となることを期待している。

注) “Goorgoorlou”のカタカナ表記では“ゴルゴルルー”となるが、“ゴルゴルー”で理解される。)

Il est certainement Goorgoorlou. (彼は確かにゴルゴルーだ。)

C'est seulement Abdoulaye WADE (President du Senegal) qui n'est pas Goorgoorlou au Senegal.

(セネガルでゴルゴルーでないのはアブドレイ・ワッド大統領だけだ。)

セネガル報告（5）

カイヤール村でのNGO最終報告調査同行記

ダカール大学 鈴 井 宣 行

ダカールから車で2時間ぐらいのところにあるカイヤールは漁業が主産業の村で、有望な基地でもある。しかし、今の時期、大西洋は強風と塵で漁に出るのが極めて危険な日が多いのである。最近でも何人かの漁師が亡くなったということだ。訪問した日もあまり漁には出ていなかったようで、水揚げも少なかったようだ。このような時は、魚の価格が上昇する。

カイヤール Cayar 村には日本のODAで大きな中央魚市場が建設され、セネガルの漁業基地の一つとして日本政府もその支援に力を入れているのである。ここには燻製場も製氷庫も設置されている。ただ、問題はこの燻製場が網に付着した大量の油の除去がなされていないため、使用されなくなり、その向こうに新たな燻製場を造っているのである。これでは、いくら新しいものを造っても、また、次の燻製場を造らなければならないという悪循環に陥ってしまう。網だけを取り替えればいいのである。しかし、これ以前に燻製を作った後、常識（日本人の）として、網を綺麗に洗剤で洗っておくという基本的なことがなされていないのである。このことをしっかりと現場作業に従事している人たちに教えていかなければならない。

ダカールからは、国道1号線沿いにあるリュフィスクの町から左に入っていくと、途中、ンボロ Mboro 方面とカイヤール Cayar 方面に行く道であるバヤフ Bayakh 村に入る。今日は大勢の人が出ており、何か行事でもあったようだ。ここからカイヤール方面の道を行くと、10分ほどでカイヤールに到着した。ここで、NGOメンバーとして7年前からこの地に住んでおられる遠藤さん（52歳）にお会いした。彼は20年前、青年海外協力隊員（水産加工）として南部カザマンス州に派遣された最後の隊員であった。彼はこの地にしっかりと根を下ろして、住民たちに慕われる存在となっており、この地域に大きく貢献されている。遠藤さんの事務所兼自宅からバヤフ Bayakh 村方面に少し戻ったところのクール・アブドゥ・ンドイ村に日本の支援で建設された託児所を備えた保健センターGalerie d'Enfants の最終報告確認調査に同行させてもらったのである。この保健センターはちょうど二つの村の中間地点—両方の村の人が利用できる—にあり、かつ、幹線道路に面し、建設場所が平らなところ—この辺りは緩い丘陵地になっており、平らなところを探すのは大変である—という絶好の地理的条件を備えていた。これも遠藤さんの地元根付いた現地調査のたまものである。遠藤さんの住まいはこのカイヤールでは「豪邸」である。ただ、

この建物の中には「教室」が一室あり、子供たちが学んでいる。しかし、その教室の前にある遠藤さんの部屋（事務所兼用）に子供たちは一切入ってこない。これは校長先生との約束事となっている。

今回の訪問の大きな目的は託児所付き保健センターGalerie d'Enfants と Keur Abdou Ndoye 小学校（公立）とコーラン学校を訪問することであった。

保健センターは上述したように二つの村人が利用できるという利点を持っている。また、小学校（これも日本のODAで建設された）については、授業内容、学校運営などについて校長先生からお話を伺ったが、やはりここでも他のところと同様に運営資金の不足が問題となっている。この小学校は約 160 名の生徒が在籍している。二つの教室を使用しているが、一教室にかなりの生徒を収容することになり、先生方も生徒数が多いため、きめ細かなことまではなかなか手が回らないとのことであった。また、授業は全てフランス語を使用している。私が「なぜウオロフ語などの国語を使用しないのか。」と尋ねたところ、担当の先生からは「将来はフランス語が不自由なくできなければ仕事を見つけるのは無理だし、極めて困難になるからです。」との答えが返ってきた。ただ、ここでもウオロフ語を使用するにしろ、フランス語を使用するにしろ、低学年ではどうにも問題がある。それは子供たちの言語能力がまだ不十分であるからだ。それならば、小学校入学後からフランス語のみで授業を行ったほうが子供たちのためにもなると先生方は考えている。この問題は政府の言語政策にも関わってくる問題である。教材も先生方が黒板に板書したものをノートに書き写すという形で、教材不足も深刻である。

コーラン学校(ダアラ Daara)ではアラビア語によるコーランの学習が主で、まだ古い形でのコーラン教育が行われている。今盛んに新聞紙上で扱われ、政府の大きな教育政策の一つとして進められているコーラン学校改善政策である“Daara moderne”の流れは、まだこの地までは届いていない。

小学校に行っている子供たちとコーラン学校の子供たちの生活レベルも彼らが着ている服、持ち物などを見比べてみると、その差は一目瞭然である。この地でもまだまだ多くの子供たちが普通教育を受ける環境は整っていない。

クール・アブドゥ・ンドイ村の村長さんにもお会いした。村には2基の井戸が掘られていた。その井戸には手押しポンプが付けられており、この《ポンプ》が女性たちにとってはかなりの負担軽減になっており、彼女たちが空いた時間を他の仕事に回せるので大変助かっているとの話であった。あのつるべを使用した水汲みほど辛いものはない。さらにそれを頭に載せて、家まで運ぶ、時には数キロも運ぶこともある村もある。

支援というのは、現場の人たちがほんとうに日常生活を改善できる状態になるのかをしっかりと継続的に見極めていってこそ、「支援」と言える。「全て施設は完成したので、

これで終わりです。」では支援とは言えない。この後のアフター・ケアが重要なのである。この維持管理をどのようにしていくかをプロジェクトが始まる前段階として現地の人々としっかり協議しておかなければならない。この事前協議が成功するかしないか、これにこそプロジェクトの成否がかかっているのである。この事前協議のための予算をプロジェクト予算の中にしっかりと組み込んでおく必要がある。

これがなされていないプロジェクトは、その時点で不成功—施設設置後、2～3年で稼働しなくなるという状態が続出する—となることは明らかであろう。

さらに、今回の現地NGOメンバー訪問で考えさせられたのは、高い派遣費用を使い、2週間や1ヶ月の滞在で来るコンサルタントよりも日本政府として現地NGO（現地の日本人NGOも含めて）を育成することが重要であろう。ただ、現在言われているような、NGO活動が大きな収入源として現地の担当者の懐に入っているといううわさも否定できないような状況を払拭し、誰からも後ろ指を指されることのないよう、改善していかなければならないことも大きな課題である。

遠藤さんの姿を通して、今後の日本政府、NGO活動を含めた援助・支援活動が「現地の状況、意見を検討し、なるべくプライオリティをそこに付与していくことも考える必要が

あろう。

遠藤さんは「まず現地の人（当事者）に少々の手際がある場合には、どうすべきかを考えさせる。」ということを経験している。それ故、遠藤さんのところに話がきても、まずその相談者たちに村長さんとの話し合いをさせ、それから、村長さんから具体的な話がきた場合には、遠藤さんの出番となる。NGO活動は現地の人々に如何に納得させながら、事業を進めていくかが重要である。また、現場（ここではカイヤール村）とダカールとの連携が不可欠との話も伺った。ダカール本部がしっかりした仕事（事業計画など）をしてくれるからこそ、現場も遅滞なく、良い仕事ができると遠藤さんは考えている。

遠藤さんは毎日、夕食後、誰の家を訪問するとは決めずに、その日に出会った村人の中から「今日はあいつのところへ行ってみよう。」と、家庭訪問をされている。別に取り立てての話をするわけではない。世間話でいいのである。この積み重ねが今、現在、大きな結果を遠藤さんにもたらせている。それは村人の彼に対する「絶大なる信頼」である。彼は「協力」という分野で最も大切な、この「信頼」という二文字を日々の家庭訪問で築いてきたのである。これは簡単そうに見えるが、これほど困難なことではない。外国人を自分の家の中に気軽に入れることは現地の人々が最も嫌うことであろう。

私は遠藤さんのこれまでの7年間の「家庭訪問」の積み重ねの結果を我が目で目撃した。それはカイヤール近辺、ことにカイヤール村では彼の顔を知らない者はいない、言い換えれば、彼の顔を知らない者は「よそ者」なのである。それほど遠藤さんの顔は知れ渡って

いる。魚市場に出かけたときも、歩いていると、すれ違う人のほとんど全員が「エンドウ、エンドウ」と声をかける。数歩歩くと、別の人が「エンドウ」と声をかける。また、数歩歩くと、別の人が「エンドウ」と声をかける。子供たちは「エンドウ、エンドウ」と言いながら、遠藤さんと一緒に歩き始めるのである。これらの光景には本当に驚かされた。今までかつて、このような光景には出会ったことがない。

遠藤さんは私にはっきりと言った。「この村にいるかぎり、私は飢え死にすることはありません。誰かが助けてくれます。」と。

ここで思い出したことがある。私が大使館在勤中、セネガル南部のカオラック州ミシラ村に日本のODAで建設された漁業センターを二度訪問したことがある。現在、このセンターはあまり上手く行っていないとの話で、要人視察でもここは外されているようだ。当時の話では年間生産額もかなりあったそうだが、それほど生産額を誇っていた同センター注)が何故上手く機能しなくなったのか、是非その理由を知りたいものだが、果たして本当の理由が分かるだろうか疑問でもある。当時、このセンターで漁業の専門家として活躍されていた及川さんという方がおられた。及川さんはこのセンターの計画段階から関わっておられたそうであったが、ミシラ村の人々の及川さんに対する接し方が遠藤さんと似通っていたのである。及川さんは歩いていると、必ず村人に「どう、元気？ 家族は元気か？」と声をかけておられた。村人も「オイカワ」と声をかけていたのである。遠藤さんも及川さん（ミシラ村には5年ほど入っておられたのではないかと思う。ちなみに及川さんの住居は隣村にあったホテル・トゥバクター内の離れであったように記憶している。）も日頃の生活の中で住民との絆をしっかりと作り上げ、「信頼関係」を築いていかれたのである。

このお二人のように地道—これが最も必要とされる要素だと私は考えている—ではあるが、このお二人のように、素晴らしい国際協力を行っている人を今まで見たことがない。たぶんこれからも遠藤さんや及川さんのような方には会うことはないだろう。

注) このセンター周辺にはマングローブが自生しており、このマングローブに付着する牡蠣が採れるが、この牡蠣が結構美味しく、ダカールのアルマジ岬で食べられる。